

# 地域と作る演劇と日本語教育

## —まほろば国際プロジェクト I・II—

Gehrtz 三隅友子（徳島大学国際センター）

[misumi@isc.tokushima-u.ac.jp](mailto:misumi@isc.tokushima-u.ac.jp)

### 1. はじめに

2007年から2年にわたり大学の日本語教育コースに演劇活動を取り入れることを試みた。本稿は、この実践をもとに演劇と日本語教育の関係について考察するものである。

まず教室を出て地域を舞台としたことに焦点を当て、大学と地域が一定の期間にどのように連携を進め、そして活動を実現するにいたったのかを明らかにする。さらに、前述の組織間の連携に加えて日本語教師が演劇活動をどのように理解し取り入れたかを、日本語教師らのアンケート<sup>1</sup>の結果も踏まえて記述する。特に本活動では演劇の専門家の指導を仰いだ点も考慮に入れる。そして関わった人々の評価から、演劇活動が日本語教育に、あるいはまたより広い意味で、演劇活動が日本語学習者とその周りで彼らの学習を支える人たちにもたらす意味を考える。

### 2. 事例としての演劇活動

#### 2-1. 美馬市とまほろば国際プロジェクト

2008年1月27日（日）及び同年12月23日（祝日）に徳島県美馬市脇町劇場オデオン座にて、徳島大学日本語研修コースの留学生が地域住民と協力して演劇を上演した<sup>2</sup>。この活動には、毎回約150名の地域の人々が参加し、演劇を通じた交流会を実施した。

美馬市<sup>3</sup>は徳島県西部（徳島市より西へ約33km、JR普通列車にて約1時間の距離）に位置し、江戸時代にはうだつの町並みに象徴される藍商によって栄えた地域である。現在は、平成の市町村合併後、市としての体制を整え新たに発展しようとしている、がしかし、若年人口の減少といった地方都市の問題を抱えているのも事実である。観光以外に特に大きな産業も無く、地域住民は自らの文化を保護しつつ自分たちの生活を守る必要に迫られている。また、美馬市は「四国のまほろば、美馬市～だれもが住みたくなるまちをめざして～」を将来像としている。この「だれでも」は広く外国の人にもと呼びかけており、住むことが誇れる、人々が交流できる、人権が保障され常に元気に活動できるまちを創造することを目指している。そのためには地域外から多くの人を呼び込み、それとともに住民が自らの地域を発展させようとする活動<sup>4</sup>が必要であろう。他からのいわゆる異文化流入を受身に待つのではなく、積極的に受け入れることによって、そしてそれらを利用しながら、地域を活性化していくことが一つの方策と考えられる。

本プロジェクトは、敢えて外国人留学生と地域の人々との出会いを設定し、時間をかけてゆるやかに異文化体験とそれに基づく理解を進めていこうとするものである。よってその名称を「まほろば国際プロジェクト」としている。

## 2-2. まほろば国際プロジェクトの経緯

地域と大学間の関係作りは以下のように進められた。平成 15 年に徳島大学内に地域連携推進室さらに地域創生センターが設立され、大学と地域が連携を強化するためにまた具体的な活動が学内の各部門に要請された<sup>5</sup>。国際センター（旧留学生センター、2008 年 12 月に改組名称を変更した）では、これまでも地域との関わりを考えた異文化理解の取り組み<sup>6</sup>として、学内での各種講座の開催、県内の教育機関への出張講座さらに出会いの場として学内で「国際交流サロン」を実施してきた。これらの実践から、さらに大学外の地域でまたケーススタディ（事例）として、まほろば国際プロジェクトを計画、提案したところ美馬市首長から実施の承諾を得た。

### 2-2-1. まほろば国際プロジェクトⅠー演劇にいたるまでー（2007 年度）

一年を三期に分け、第三期の演劇活動に至るまでに徳島大学の留学生が美馬市を訪問し様々な交流活動を行った<sup>7</sup>。国民文化祭（第 22 回は徳島県にて開催）への参加も含め、何度か訪問するうちに様々な人と知り合い、美馬市在住外国人を演劇活動に招くことも可能になった。

表 1 まほろば国際プロジェクトⅠ活動 2007 年度

期	日時	参加者と活動	備考	機関
第一期	7 月	日本語研修コース旅行 初級 6 名 郡里小学校訪問 児童数約 100 名	授業見学と国紹介 ホームステイ	教育委員会
第二期	10-11 月	武漢大学（協定校）短期研修 上級 学生 9 名 国民文化祭イベントラウンジ （能楽・祭り・映像フェスティバル）参加	国民文化祭美馬市実施 イベントの運営を支援 ホームステイ	教育委員会
第三期	12-1 月	日本語研修コース初級 6 名 市民約 40 名 演劇（身体的コミュニケーション学習を含む）	ホームステイ・交流会	観光文化室

表 2 まほろば国際プロジェクトⅠ 参加者総数

人	第一期 ①7 月	第二期②10~11 月	第三期 ③12~1 月	計
i 外国人留学生	6 名	9 名	7 名	22 名
ii 日本人学生	—	18 名	1 名	19 名
iii ホームステイ	5 家庭	12 家庭	5 家庭	22 家庭
小学校関係	100 名	—	90 名	190 名
イベント関係	—	市職員・参加者∞	—	∞
演劇関係	—	—	40 名	40 名
観客	—	—	147 名	147 名

外国人 留学生以外の	—	市職員 2名	ベトナム人研修生 4名 中国人配偶者 5名	11名
				22 家庭 429 名

### 2-2-2. まほろば国際プロジェクトⅡ (2008年度) —演劇にいたるまで—

2008年度は前年に引き続き、美馬市独自の国際交流及び教育活動に関する協力支援を行う形をとりつつ以下のように実施した。特に教育機関との関係から宣伝及び波及効果はあったように思われる。

表3 まほろば国際プロジェクトⅡ 2008年度

期	日時	活動	備考	機関
第一期	7月	日本語研修コース旅行 初級4名 三島小・中学校訪問	授業見学と国紹介 ホームステイ	教育委員会
第二期	10-11月	・「7インシュタイン LOVE 美馬市」参加。 研修コース初級9名 ・美馬市教育振興大会 「ウベワルター演奏会」支援	・7インシュタインと美馬市の交流 ・演劇の音楽家の市内での 演奏活動	秘書課 教育委員会
第三期	12-1月	日本語研修コース 初級9名 美馬市市民のべ約20名 演劇(身体的コミュニケーション学習を含む)	ホームステイ・交流会	教育委員会

表4 まほろば国際プロジェクトⅡ 参加者総数

人	第一期 ①7月	第二期②10~11月	第三期 ③12月	計
i 外国人留学生	4名	9名	(10月と同じ) 9名	13名
ii 日本人学生	—	—	2名	19名
iii ホームステイ	4家庭	—	6家庭	10家庭
小中学校関係	170名	500名	—	670名
演劇関係(舞台)	—	—	30名	30名
観客	—	—	110名	110名
外国人(留学生外)	—	職員2名・音楽1名	通訳1名	4名
				10 家庭 847 名

### 2-3. 演劇活動

第三期がまさに演劇活動になるが、両年とも第一期と第二期に研修旅行や様々なイベントへ参加及び協力によって、関係づくりを行い市民への広報を進めた。演劇活動に関しては、資料1の表のように実施した。日本語学習に課外学習を加えた形式で教室を離れて、美馬市内のオデオン座<sup>8</sup>及び他の公的施設で地域の住民と一緒に練習し上演するにいった。

## 2-4. 評価

### 2-4-1. 参加及び関係者からの評価

特に二年目の2008年の聞き取り及びアンケート等から得られた評価を以下にまとめる。

人	評価	評価内容
＜第一期 7月＞		
留学生 4名	満足	初めて日本人家庭に泊まる体験ができた。
ホームステイ家庭	満足	異文化理解につながる貴重な体験、特に韓国や中国を身近に感じた。
中学校	満足	「アイツタイン博士と交流のあった美馬市出身の三宅理の業績を研究」その成果を留学生に披露また留学生の発表を聞くという双方向の活動ができたことに互いに達成感を得た。
＜第二期 10-11月＞		
美馬市		シンポジウム会場で留学生と中学生との交流が活発に行われ出会いの場となった。外国人と接触する機会がない中学生にとっては貴重な体験であった。
教育委員会		ウベワルター氏の和楽器演奏から、外国人が日本文化を大切にしている姿が確認できた。氏が出演した「バルトの楽園」の映画紹介を通して、徳島にも以前から外国人を受け入れる土壌があったこと等が確認できた。
＜第三期 12-1月＞		
留学生 9名	大変満足	日本の家庭を知ることができ、学習した日本語を実際に使う場であった。演劇は練習が大変だったがクラスメートや日本人と協力できて満足、また自分の日本語に自信が持てた。
ホームステイ家庭	おおむね満足	事前情報のない国の人を受け入れに不安があったが、約5日間のふれあいを通していろいろな気づきがあった。
観客	(回答数 20) おおむね満足	また参加したい。このようないろいろな交流活動を体験したい。留学生が日本語を一所懸命使って演じる様子は感動的だった。
演劇指導者		昨年に比べ、練習時間が短いことや日本語力を考え今年は比較的易しい作品を選んだ。メッセージとしては観客に伝わったと思う。留学生全員で一匹の鬼を演じ、ト書きや他の役を地域の人をお願いしたことで練習等の負担が減った。オデオン座が人と人を結びつける大きな役割をしていること。他の施設ではこの感覚はない。また年を経て人とのつながりができているように感じる。
音楽家		即興のアドリブを要求されたが、留学生、指導者とも今日慮言うが出来たように思う。
演劇参加者		身体的コミュニケーション(身体ほぐし、発声練習等)を留学生とともにすることから始めて演劇練習そして舞台にたった。昨年に続いて楽しかった。
教育委員会担当者		この活動が目指すものが見えてきたように思う。学校関係者、生徒さらにホームステイ受け入れ家庭等の調整が大変であったがそれぞれが初めての体験であり、満足したことを確認した。調整連絡等には改善の余地があり、今後の課題となる。ホームステイを含めた国際交流の窓口あるいはネットワーク構築の必要性がある。

## 2-4-2. 教師の評価

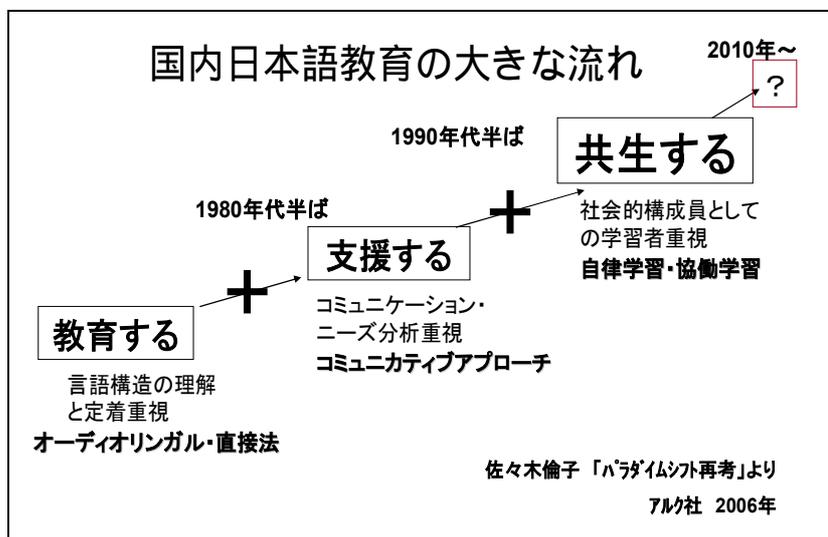
前述の評価をもとに、実施者である教師の側から成果と今後の課題について述べる。

まず、美馬市が観光等による町興しを進める中で、地域の文化施設のこれからの利用のありか方を提示できたことが挙げられる。いわゆるプロの芸術家を招いて人を集めるといった方式だけでなく、地域の人々が何らかの形で劇場を使う例として、このような演劇を通して住民同士が連携を図り自らが楽しむ可能性があることが確認できた。さらにホームステイ、学校訪問交流、演劇活動を通して外国人と付き合うことの楽しさやステレオタイプを越えた価値観を作るきっかけを提供できたこと、また外国人留学生の側からは、活動を通してより深く日本人を知る機会を得たことや、美馬市という徳島市内とは違った地域で、その歴史的な文化に触れることができたことが良かった点として挙げられた。そして、何よりも本プロジェクトが目指す「多文化共生社会の実現」への第一歩、地域住民への異文化理解さらに国際化を促すきっかけが提示できたことが成果である。また次の段階に必要な活動を地域と共に考え、課題とすることができると思われる。

## 3. 演劇と日本語教育

### 3-1. 多文化共生と日本語教育

国内の日本語教育の流れを、佐々木（2006）は図<sup>9</sup>のように説明している。それは、「教育する」に「支援する」がさらに今「共生する」の視点が加わっていることである。教師が日本語の様々な知識を「教育する」のは当然である。そして、学習者が日本語話者とコミュニケーションすることを目標とし、日本語を使う「場」やタスクやプロジェクトワークといった「活動」を設定し「支援する」ことももはや当然であろう。さらに、我々を取り巻く社会が変化すると同時に日本語自体も変わっていること、この事実を学習者と



共有しながら、学習者が日本の地域社会の一員として互いに認められるかを目標とする、これが「共生する」日本語教育の目指すものである。この多文化共生のための日本語教育を考える際には、学習者へと日本人への両者への働きかけが必要であろう。この働きかけこそがまさに演劇を通じた「まほろば国際プロジェクト」と考えられる。すなわち教室内で日本語を「教え」、学内外でのコミュニケーションを「支援」し、さらに地域では「共生」の可能性を図る活動である。

### 3-2. 演劇活動と日本語教師

言語教育の一つである日本語教育において、教師によって差こそあれ教室内で演劇的手法<sup>10</sup>を使うことは自明のことである。しかし、前述の流れに沿って、「教育する」に「支援する」と「共生する」が加わり、さらに教育の目標となった場合ではどうだろう。演劇的手法あるいは演劇活動を教育に効果的な手段として捉えるのではなく、もしかすると「演劇そのもの」を「共生する」ための手段とすることも可能なのではないだろうか。

本研究発表時に筆者が行ったアンケートをもとに考えを進める。回答は演劇活動に関してはおおむね肯定的（35名中28名）で、特に実施過程が大切なことや、学習者の動機付けや達成感等で効果があることを強調している。一方、その効果を認めつつも躊躇する意見（7名）として、①教師が「自らが開示する」必要性がある、また②自分自身が発音及び演劇を学ばなければならない状況にある、さらに③クラスサイズやレベル等で実施できない状況にある、④消極的な学習者に演劇をさせるというのが難しい等も挙げられた。さらに自由記述の中で、演劇活動が日本語教育から地域との交流にまで広がるという考え方には12名（自由記述34名中）から賛同を得た。

演劇活動そのものに対しては各人の経験によって差が生じていることも否めない。演出家の平田オリザ氏は現在にいたるまで国語の教科書から戯曲が減る傾向にあり、教師自身が教育の中で十分に演劇的知<sup>11</sup>を体験することが少なかったこと、あるいは教育における演劇の役割が問われてこなかったこと等を指摘している<sup>12</sup>。

いずれにせよ、教師側に演劇に対する発想の転換が必要なことが理解できる。

### 3-3. 演劇指導者と日本語教師

日本語教師が自らの教育に演劇そのものを取り入れることは、前述の回答にもあったように簡単なことではない。筆者の日本語教師としての体験を一例として提示する。

自らの教育活動に演劇を採用することを意識したのは、2004年のメディア教育開発センター（2009年3月に廃止）主催のFD研修「教育コミュニケーションの基礎」に参加したことに始まる<sup>13</sup>。その際に出会った演劇指導者<sup>14</sup>にまほろば国際プロジェクトの演劇活動<sup>15</sup>の指導を依頼している。演劇にいたるまでの自らが身体に対して気づきそして声と言葉に対して気づき、また他者と共有する過程を体験することが大きな目的である。

指導者の学習者への関わりの中で、日本語教師はメタ的な視点でそこで行われている学習あるいはコミュニケーションを観察することが可能となる。学習者がどのように日本語を認識しそしてどのように表現手段として使おうとしているのかを、教える立場を離れてみる（観る・診る・看る）ことができるといえる。またさらに指導者のアプローチが演劇者の身体的コミュニケーションを駆使し、表現することを伝える姿勢も、自らの「教える」「支援する」ではなくまさに「共生する」指導のあり方と考える。

言い換えれば、前図の教育の流れに従って、筆者である日本語教師がその指導の方法に演劇指導者の方法を取り入れられるかを問うた感がある。

演劇活動をプロジェクトワークの一つとして考えてみれば、様々な役割を担当する外部協力者

の力を借りて、また学習者の主体性を大切にして実施することは当たり前のことである。こうして日本語教師が演劇活動を含めて全ての指導をしなければならないという考えは払拭されるだろう。

#### 4. むすびにかえて

留学生と共に美馬市の様々な機関を訪れたり、またオデオン座にて演劇の練習をしたりする過程で次のような体験を何度もした。まず子どもや高齢の方の驚きの目とそして表情である、うれしいともいやでもない「初めての出会い」といったようすから、留学生たちからやさしい日本語で話しかけられ、日本語でコミュニケーションできるという感触、さらに近くによっていろいろなことを質問したり答えたり、また一緒に身体ほぐしをする中で両者がにこやかな表情になっていくのを見るという体験である。両者それぞれが互いに自分なりの価値基準（ものさし）を懸命に作り認め合う作業であろう。大学内での講義や演習ではとうてい提供できない場面である。そして外国人の少ない地域では、やはり若い世代にまずこのような体験をしてほしいこと、また、提供していく立場にあることも実感している。

「共生する」社会のための一つの働きかけとして演劇活動を取りあげたことを記述し考察するのが本稿の目的である。教師自らが他の教師や専門家そして地域の様々な役割を担う人たちと協力し、一つのものを作りあげていく、対話を通した「共生」のあり方を考えていきたい。

付記 本プロジェクトも2009年に3年目の計画最終年度を迎える。本稿は2年の段階での経過と考察を述べるものである。

謝辞 まほろば国際プロジェクトに関わり、演劇を作った留学生をはじめ、活動を支えたコメントを下された美馬市のみなさんに、さらにウィーン大学における本発表に対してアンケートを丁寧に回答してくださった参加者の皆様に深く感謝いたします。

#### 注

- 1 2009年8月27日於ウィーン大学にて、日本語教師及び学生35名（日本からの参加10名）から回答を得た。このアンケートでは以下の三つを問うた。本発表を聞いて1) 演劇活動を取り入れてみたい。○はい=28、△わからない=7、×いいえ=0 2) (本活動が実施した演劇活動の前提となる、他者との身体的接触がある) 身体ほぐしをしてみたい。○はい=18、△わからない=15、×いいえ=2 3) 自由なコメント。結果は表のとおりである。

演劇活動	身体ほぐし	計
○	○	14
○	△	13
○	×	1
△	○	4
△	△	2
△	×	1

<sup>2</sup> 資料1「まほろば国際プロジェクト」を参照のこと。

<sup>3</sup> 参考美馬市ホームページ HP : <http://www.city.mima.lg.jp/>

- 
- <sup>4</sup> 現実には、EPA 経済連携協定により徳島県内には 2009 年 12 月現在、インドネシア人介護士が 8 名が既にさらに今後フィリピン人の介護士を受け入れ予定があり、今後看護や介護の領域で外国人労働者を受け入れる可能性がある。また、人口 3 万 3000 人の美馬市には国際交流員や英語助手、配偶者以外に現在約 300 名余りの研修生を食肉加工や機械製作の現場で受け入れている。
- <sup>5</sup> 徳島大学では、平成 18 年（2007 年）2 月に内閣府地域再生総本部が発表した「地域の知の拠点再生プログラム」の地域の再生のために大学が地域貢献を志向し「地域に根ざした人材を養成すること」に基づき、平成 19 年には「地域創生センター」が設立され、「人・体・物・心」と情報を結びつけた総合支援を行っている。国際センターはその中の多文化交流・地域共生事業として 1) 異なる文化を持った人を受け入れ、共生を目指す地域社会を創造する～互いの共生・協働への理解～ 2) 地域に住む住民としての外国人と日本人の関係を作る～出会いの場と共存を考える活動の提供～ 3) 徳島という地域で独自の共生を住民で考える～将来の共生の担い手に学習課題としての提示～、を目標に地域への働きかけを行っている。参考資料「徳島大学地域連携事業成果報告書」平成 18 年度、19 年度、20 年度に詳細な記述がある。
- <sup>6</sup> 2008 年 3 月徳島県は「とくしま国際フレンドシップ憲章」を策定し、多文化共生社会の実現に向けての第一歩として「知りあおう・ふれあおう・認めあおう」の三つのことばを体験する活動を広く実施している。
- <sup>7</sup> 「平成 19 年及び 20 年（財）中島記念国際交流財団助成留学生交流事業」より支援を得て、留学生と地域住民の交流事業として実施した。
- <sup>8</sup> 美馬市協町の文化の中心施設（1933 年、昭和 8 年建設）。一時期取り壊しの案があったが、住民運動等により現在も木造の当時の姿をとどめ、文化ホールの役割をしている。  
<http://www.city.mima.lg.jp/4/64/000283.html>
- <sup>9</sup> 図は佐々木（2006）をもとに、2009 年 8 月の第 22 回日本語教育連絡会議にて佐々木による発表『「ポスト 420 時間時代」の日本語教師養成』で配布されたレジюмеから氏の許可を得て 2010 年以降を加筆して作成した。
- <sup>10</sup> 演劇的手法に関しては拙稿 Gehrtz 三隅（2009b）「日本語教育における演劇の役割」を参照。
- <sup>11</sup> 渡部（2008 P.170～175）は教育における演劇的知を形成途上にあるものとし、現段階で、学習者の内部に形成される知識の構造や認識の仕方、身体への気づきや学びの作法の総体と定義している。筆者はコミュニケーション教育においては演劇的知と日本語教育が手段と目標を一つにすると考えている。
- <sup>12</sup> 2009 年 12 月 6 日（日）に摂南大学で行われた「平田オリザ氏による演劇論とワークショップ」内での講演（国際言語表現学会主催）から。また 2009 年 12 月現在内閣官房補佐として演出家からの視点で行政へのアドバイスをしている。
- <sup>13</sup> 2004 年 2004 年 9 月から、12 月翌年 8 月も続けて参加し。2006 年 2 月には徳島大学にて教師日本人学生及び地域対象に実施した経緯がある。また得た知見をもとに授業改善を行った記録は参考文献の拙稿 Gehrtz 三隅（2006）に詳述している。また主催者は、研修を通して「教育的コミュニケーション」すなわち、からだとかかわりとこえことばの構えを体験することによって、教師が学習者に対して①雰囲気を生む力②雰囲気を聞く力③雰囲気を動かす力を使うことができることを目的としていた。
- <sup>14</sup> 瀬戸嶋充氏「人間と演劇研究所」代表（2004 年当時）、現在は「からだ ZERO 本舗」スタッフとして、からだとことばのレッスン・演劇・野口体操等の指導を行っている。竹内敏晴氏に師事。
- <sup>15</sup> まほろば国際プロジェクトの演劇活動に関しては拙稿 Gehrtz 三隅（2009b）「日本語教育における演劇の役割」を参照されたい。

## 参考文献

- 伊東博（1983）「ニューカウンセリング」誠信書房  
伊東博（1999）「身心一如のニューカウンセリング」誠信書房

- 
- 台（うてな）利夫（2003）「ロールプレイング」日本文化科学社
- 栗原彬他編（2000）「越境する知1 身体：よみがえる」東京大学出版
- Gehrtz 三隅友子（2005）「初級音声教育の試み—日本人学生との会話スキット作成から朗読へ—」『日本語教育方法研究会誌』 vol. 12No. 2, pp. 2-3
- Gehrtz 三隅友子（2006）「学生評価から教師の内省へ向けて—教育コミュニケーションの基礎・身体関係からのアプローチを受講して—」NIME 研究報告 06-20 FD 形態に対する事例検討 pp. 212-237
- Gehrtz 三隅友子（2008）「地域と作る演劇と日本語教育—まほろば国際プロジェクト—」, 日本語教育学世界大会於釜山 pp. 55-58
- Gehrtz 三隅友子（2009 a）「日本語学習における身体的コミュニケーション—まほろば国際プロジェクト—」, 2009 年度日本語教育学会秋季大会、pp. 141-146
- Gehrtz 三隅友子（2009 b）「日本語教育における演劇の役割—まほろば国際プロジェクト I・II—」, 第 14 回ヨーロッパ日本語教師学会大会報告書、印刷中
- 斎藤孝（2000）「身体感覚を取り戻す—腰・ハラ文化の再生—」NHK ブックス
- 佐々木倫子（2006）『パラダイムシフト再考』「日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—」アルク
- 末田清子・福田浩子（2003）「コミュニケーション学」松柏社
- 竹内敏晴（1988）「ことばが劈かれるとき」ちくま文庫
- 竹内敏晴（1989）「からだ・演劇・教育」岩波新書 67
- 竹内敏晴（1990）「からだとことばのレッスン」講談社現代新書 1027
- 野口三千三（1980）「野口体操・おもさに貞く」柏樹社
- 羽鳥操（2008）「マッサージから始める野口体操」朝日新聞出版
- 平田オリザ（2001）「芸術立国論」集英社新書 0112
- 平田オリザ（2004）「演技と演出」講談社現代新書 1723
- 平田オリザ・北川達夫（2008）「ニッポンには対話がない—学びとコミュニケーションの再生」三省堂
- 山口創（2003）「愛撫：人の心に触れる力」NHK ブックス
- 吉田新一郎（2006）「テストだけでは測れない！」生活人新書 176 NHK 出版
- 渡部淳（2001）「教育における演劇知」柏書房
- 渡部淳（2007）「教師-学びの演出家-」旬報社
- 鷺田清一他編（2007）「身体をめぐるレッスン 3」岩波書店
- J. ポリセンコ・伊東博訳（1990）「からだに聞いてこころを調える」誠信書房
- W. バーロウ・伊東博訳（1989）「アレキサンダー・テクニク」誠信書房

## 資料 1

まほろば国際プロジェクト	
日時・場所	2008年1月27日(日曜日)午前10時～ 脇町劇場オデオン座
作品	宮沢賢治作「どんぐりと山猫」
作品内容	小学生の一郎が山猫から裁判を手伝って欲しいという依頼のはがきをもらう。山猫のために一郎は道を聞きながら山へと向かい、裁判に審判を下す。
演技指導	瀬戸嶋充・会田浩子 (人間と演劇研究所)
参加者	・徳島大学日本語研修コース6名(メキシコ・南アフリカ・ペルー・独・米) ・美馬市周辺地域住民 33名(うだつ寺子屋劇団・脇町黄門一座等)
舞台	草月流 出村丹雅草グループ
共催	美馬市 教育委員会・文化観光室
観客数	147名
実施経緯	第1回 2007年12月15日～16日 美馬市脇町にて 宿泊施設利用 留学生と住民40名とで活動を開始。本読み形式で練習し、音と意味を確認。
	第2回 2008年1月18日～20日 美馬市脇町にて ホームステイ 「どんぐりと山猫」の練習開始、役割を決定。衣装、道具類の作成を開始。
	第3回 2008年1月26日～27日 美馬市脇町劇場にて ホームステイ 各人の国紹介スピーチ練習 華道グループの舞台設営 最終リハーサル

まほろば国際プロジェクト	
日時・場所	2008年12月23日(火曜日)午後1時30分～ 脇町劇場オデオン座
作品	山下明生作「島ひき鬼」
作品内容	島で一人で暮らす鬼はさびしさのあまり、遊んでくれるものを探して島をひっぱって行く、ようやくたどり着いた村で受けたしうちとは～。「こっちゃん来て遊んで行け！」
演技指導	瀬戸嶋充・会田浩子 (人間と演劇研究所)
参加者	・徳島大学日本語研修コース9名(ラトビア・セルビア・ケニア・イメン・インドネシア・カボ・ジア・アフガニスタン・独・オーストリア) ・美馬市周辺地域住民 10名(うだつ寺子屋劇団等)・徳島大学学生2名
音楽	ウベ・ワルター ドイツ人音楽家
舞台	草月流 出村丹雅草グループ
共催	美馬市 教育委員会・文化観光室
観客数	110名
実施経緯	第1回 2008年11月1日～2日 美馬市脇町にて 宿泊施設利用 留学生の練習を開始。昨年参加の子供たちと母親らと身体ほぐしの練習。
	第2回 2008年12月19日～22日 美馬市脇町にて ホームステイ ① 劇練習開始、鬼を全員で演じる担当部分を決定。衣装、道具類の作成 ③ 華道グループの舞台設営
	第3回 2008年12月23日 美馬市脇町劇場にて ホームステイ 午前最終リハーサル 阿波踊り体操・劇・歌・交流会

本活動は平成19年及び20年度(中島記念国際交流財団)助成留学生交流事業による助成金を得た。